

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

平成 30 年 10 月 1 日	
所属部局・職	野生動物研究センター・修士課程学生
氏名	前田 玉青

<b>1. 派遣国・場所</b> (〇〇国、〇〇地域)
宮崎県 幸島
<b>2. 研究課題名</b> (〇〇の調査、および〇〇での実験)
幸島実習
<b>3. 派遣期間</b> (本邦出発から帰国まで)
平成 30 年 5 月 6 日～平成 30 年 5 月 13 日 (8 日間)
<b>4. 主な受入機関及び受入研究者</b> (〇〇大学〇〇研究所、〇〇博士/〇〇動物園、キュレーター、〇〇氏)
京都大学野生動物研究センター、杉浦秀樹准教授/幸島観察所、技術職員、鈴木崇文氏
<b>5. 所期の目的の遂行状況及び成果</b> (研究内容、調査等実施の状況とその成果：長さ自由)
写真 (必ず 1 枚以上挿入すること。広報資料のため公開可のもの) の説明は、個々の写真の直下に入れること。 別途、英語の報告書を作成すること。これは簡約版で短くてけっこうです。

## 「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

今回の渡航では、幸島でニホンザル、また都井岬で野生ウマ（御崎馬）の観察をしました。幸島には二日間滞在し、餌やり中の攻撃行動について調べました。1日目は $\alpha$ オスのシカ、2日目は $\alpha$ メスのシデを観察しましたが、両方について、特に高順位の個体を攻撃する傾向が見られ、特にシカの攻撃の多くはシデに対して行われました。個体が自分の近くに来たときに餌を守るために追い払うという目的で攻撃が行われているようだったので、近くに来ることができる個体が必然的に高順位の個体に限られたためであると思われます。また、高順位の個体は自分の地位を脅かすライバルとしてとらえているので、近くにいるときにより目につきやすい、という効果もあるかもしれません。

都井岬には、計3日間滞在し、群れを2時間ずつ追いかけてその活動時間配分を調べました。御崎馬についても、他の地域や御崎馬の先行研究と同様、摂食行動が大半を占めていました。一方で性差もみられ、オスは群れを護る行動（喧嘩・ハーディング等）が多くみられ、その代わりに摂食行動はメスより少なく、採食バウト長も、オスはメスよりも平均100秒短いことがわかりました。群れの維持にオスが大きく関わっていることを示唆する結果でした。

また、観察中、飼い犬に近づいて舐めてもらうという行動をする親子がおり、どのようにこの関係が構築されたのか非常に興味深く思いました。

私はポルトガルでガラノという野生ウマの研究をしており、ちょうどポルトガルに初滞在する前の月だったので、研究プランを考える上で非常に参考になりました。御崎馬よりガラノの方が性的二形がみられること、御崎馬は例えばこの林道はある特定の群れが使う等、縄張りの的なものがありそうだがガラノにはないこと、など、個体群間でも行動に違いがありそうでした。今後、ガラノだけでなく別個体群を比較して行くのもおもしろそうだと思います。



幸島のニホンザル



御崎馬の若メス



犬に体を舐めてもらう親子のウマ

### 6. その他（特記事項など）

このような機会を与えてくださった PWS、また現地でお世話になった鈴木さん、杉浦先生、ほか同行した履修生の方々に感謝を申し上げます。